

いぽをかえたらき

ロバート・ローソン さく・え 小出正吾 やく



933 Lawson, Robert
(NDC)

しっぽをかえたうさぎ

ロバート・ローソン著 小出正吾訳

学習研究社

124p 図 22cm (たのしい幼年童話・1)

原題: ROBBUT, A TALE OF TAILS

©1981 無断複写複製(コピー)を禁ず

* Printed in Japan



□訳者紹介

小出正吾
こいでしやうご

一八九七年静岡県三島に生まれる。早稲田大学商科卒業。貿易商社員としてインドネシアに赴任。帰国後、処女作『聖フランシスと小さな兄弟』の出版を機に文筆生活にはいり、童話の創作と英米児童文学の翻訳を続けるかたわら、約十六年間、明治学院で教鞭をとった。一九六六年から七二年まで日本児童文学者協会会長、現在同会名誉会員。日本児童文芸家協会顧問。

主な作品に、自伝的作品集『ジントの音』、童話集『白い雀』『かっぱ橋』、絵本『のろまなローラー』など、翻訳に『聖書物語』『指ぬきの夏』『イソップどうわ』などがある。

しっぽをかえたうさぎ

ロバート=ローソン さく・え 小出正吾 やく



学研・たのしい幼年童話

ROBBUT, A TALE OF TAILS

by Robert Lawson

Copyright ©1948 by Robert Lawson

Japanese traslation rights arranged with

The Viking Press, New York

through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

装丁・舟橋菊男

もくじ

みんなのしっぽは、いいなあ……	4
おれいに、しっぽをもらって……	16
こんなはずでは、なかったのに……	30
こんどの、しっぽこそ……	41
だれも、わかってくれない……	54
きつねに、であつたばかりに……	72
おわれに、おわれて……	85
ぼくのしっぽこそ、 せかい 世界一……	99



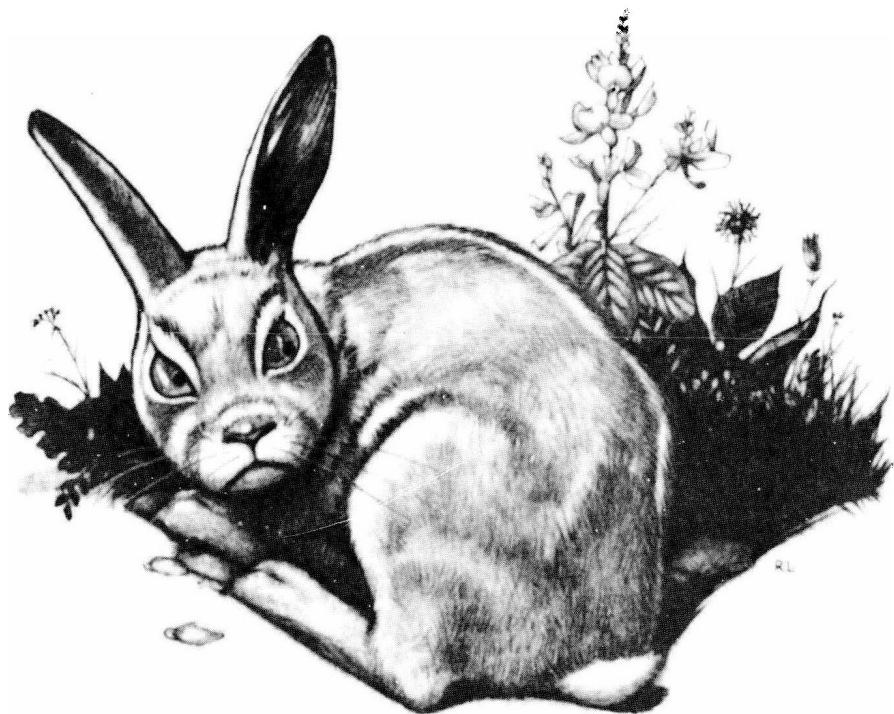
みんなのしっぽは、いいなあ

うさぎのラバットは、すっかり、ふさぎこんでいました。

げんきのいい子^こうさぎなので、いつもは、すこしぐらい、おもしろくないことがあっても、いつまでもかんがえこんでいるようなことは、ないのですが、きょうは、一日^{いち}じゅう、むしゃくしゃしていました。——じぶんのしっぽが、きにいらぬのです。

こんな、つまらないしっぽは、もう、一分^{ぶん}かんだって、つけていられるもんかと、ラバットはおもいました。せいっぱい、くびをのばして、うしろをみても、しっぽのさが、ちよっぴりみえるだけなのです。まったく、しっぽだなんて、いえたものではありません。

「みてよ！ このしっぽ！ ふるわたのふさか、あかんぼにんぎょうのパ



フみたいじゃないか。なんのやくにも、たちやしないし……。」

ラバットは、ぶつぶつ、ひとりごとをいいながら、ねこのしっぽのこを、かんがえてみました。ねこは、おこったり、こうふんしたりすると、しっぽを、はげしくふりまわすことができるし、ごきげんなときは、ぴんとたてて、いばったりすることもできます。

うしのしっぽにしたって、そうです。あのとおり、みごとな、はえたたきのやくめをします。

りすの、ふさふさしたしっぽは、雨^{あめ}や雪^{ゆき}の日のマントになるし、さむい夜の、もうふにもなります。

それに、ふくろねずみのしっぽだって、かつこうは、あまりよくありませんが、やくにたつことでは、さいこうです。しっぽを木^きのえだにまきつければ、いつまでも、ぶらさがっていられるし、あかちゃんはおかあさんのしっぽに、じぶんのしっぽをつないでいれば、あんしんして、おんぶしていられます。

——みんな、なんてすばらしいしっぽを、もってるんだろう。

「それなのに、ぼくのしっぽときたら、なんだい？　ちっぽけな、わたくずのふさじゃ、しょうがないじゃないか。」

ラバットは、まだ、ぐずぐずいっていました。

ほかに、みかけのいいしっぽは、たくさんあります。スカンクの、つやのある、白^{しろ}とくろのしまのしっぽは、はねのようにふんわりしていて、

そよ風になみをうちます。

きじのしっぽは、いろんな色のはねがまざっていて、とてもすてきです。あかぎつねのしっぽのことをおもうと、ラバットは、うらやましくてたまりませんでした。それこそ、しっぽの王さまといっているでしょう。ながさも、ふとさも、きつねのからだとおなじくらいあって、ふさふさしていて、さむい冬の夜には、手足のさきから、はなのさきまで、ふんわりと、つつんでくれるのです。

ラバットは、もう、じぶんのしっぽなんか、みるきもしませんでした。みじめなきもちで耳をかくと、しよぼしよぼと、あるきだしました。

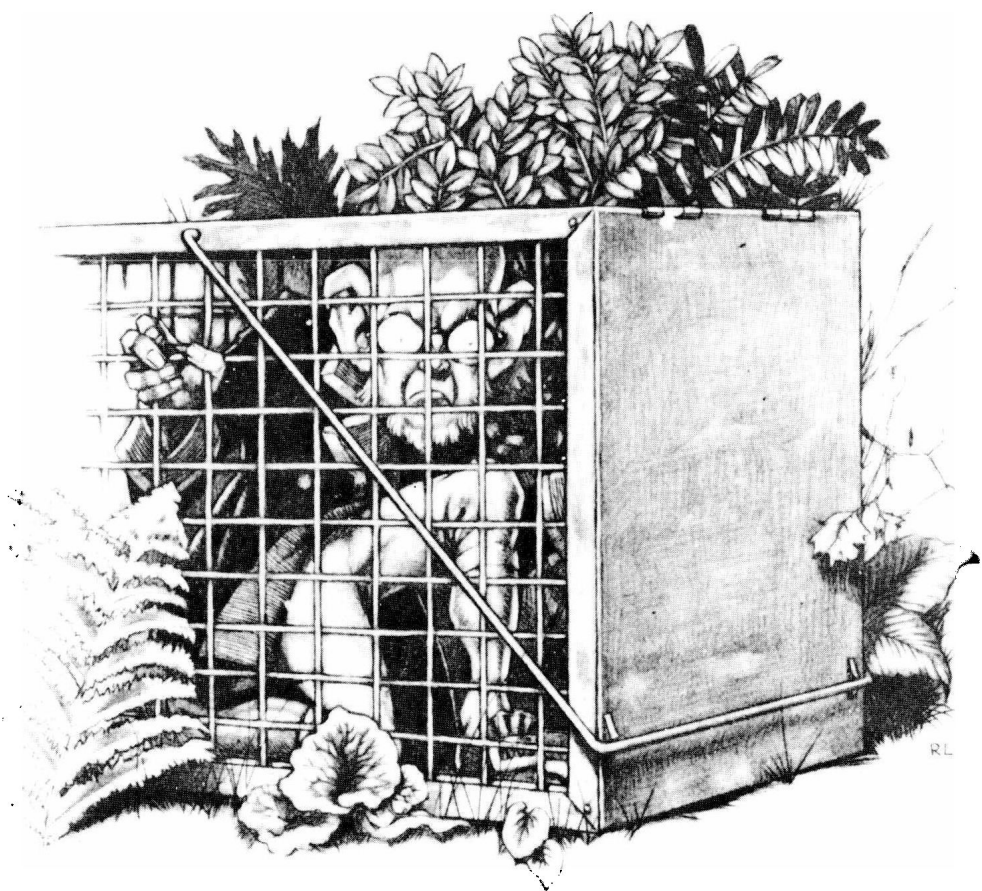
ラバットは、おかきゆうなさか道をおりて、まつ林のあいだのはらっぱへでました。そこは、草がぼうぼうとはえているので、そのしげみをかきわけていかなければなりません。ラバットは、なおさら、いらいらしてきました。

けれど、ちゃんとした道には、わながしかけてあるので、まわり道をしないわけには、いかないのです。ほかのけものたちも、みんな、そのことをしっていて、だれも、つかまりはしませんでした、それにしても、めんどうなことでした。

やぶをとおっていくうちに、ふと、てつとはりがねの、ガチャガチャなる音がしました。だれかが、わなにかかっているのに、ちがいありません。「きつと、このあたりに、なれてないやつなんだな。いつてみてやろう。」ラバットは、そーつと、音のするほうへ、ちかづいていきました。

やっぱり、なにかが、わなにかかっていました。でも、それは、けものではなくて、こびとだったのです。せのたかさは、ラバットの二ばいぐらのこびとで、もうれつに、おこっていました。

わなは、かなり大きな、てつとはりがねでつくったおりで、けものをきずつけないで、いけどりにするようにできていました。おかの上にすんで



いる少年しょうねのものなのですが、まだ、なんにもとれたことがないので、めったにみまわりにこないのです。

こびとが、いつごろわなにかかったのか、わかりませんが、やせこけて、ひどくきがたっているところをみると、もう、だいぶながいこと、つかまっているようでした。

こびとは、はげあたまのおじいさんで、あたまのうしろのまわりと、あごとに、ほんのちよつぴり、しらががはえていました。そして、金ボタンきんのついた、ふるいかたの青あおいうわぎに、はんずぼんをはき、銀ぎんのとめがねのついた、さきのかくばったくつを、はいていました。

ラバットは、おかの上うへのどこかに、こびとのおじいさんがすんでいるという、わさを、きいてはいましたが、じっさいにみたのは、これが、はじめてでした。そこで、ようじんしながら、ちかづいて行って、ていねいにたずねました。

「なにか、おてつだいできることは、ないでしょうか？」

「あるともさ！」

こびとのおじいさんは、かみつくようにいいました。

「こんな、いまいましいめにあっているわしを、たすけないってことはないだろう。もっとも、おまえさんに、それだけのあたまがあればだね。

そいつは、あやしいものさ。だいたい、うさぎってのは、あたまがよわいことになってるんでな。おまえのじいさんをしていたが、あれは、いくら、あたまがはたらいた。だが、おまえのおやじさんときは、だいぶにぶくなっているから、おまえとなつては、もっとだめだろうよ。」

ラバットは、なるほどと、おもいました。そこで、なんとかして、おりをあげようと、けつてみたり、あたまをぶつつけてみたり、いっしょうけんめいやつてみましたが、なんのききめもありません。

こびとは、みかねていいました。

「おい、おい。ぼうや。あたまを、かなづちのかわりにしないで、もっと、かんがえるほうにつかつたらどうだい。ほら、このふたの上に、ふといはり、がねがあるだろう。こいつを、上までもちあげれば、おりがあいて、わしがでられると、いうもんだ。」

ラバットは、からだじゅうの力を^{ちから}しばって、まず、まえ足ではりがねを

すこしもちあげ、その下にはなをつつこんで、だんだんおしあげていきました。ところが、たちまちすべりおちて、もとにもどってしまいました。

「だめだなあ。まあ、いいから、小えだを一本、もってきておくれ。」

こびとのおじいさんに、そういわれて、ラバットは、小えだをもつてきて、わたしました。それからまた、はりがねをもちあげにかかりました。はりがねが、すこしもちあがるたびに、こびとが小えだをさしこんで、さえにしました。ようやく、はりがねは、ふたの上まであがりました。すると、そのとき、小えだがおれて、おもいはりがねが、ラバットのまえ足におちてきました。

「あいたっ！」

とさけんで、ラバットは、足をさすりながら、つぶやきました。

「ぼくに、ふくろねずみみたいなしっぱがあつたら、おりの上にのぼって、かんたんに、はりがねをもちあげられるのになあ。」

それをきいて、こびとは、は
きだすようにいいました。

「なにをいつてる！ そんなし
つぽが、おまえさんにあるはず
がないじゃないか。それよりも
もっとじょうぶな小えだを、も
つてきておくれ。」

ラバットは、もつとふとい小
えだをわたして、また、おした
り、ひっぱったりしました。そ
して、はりがねが、ようやく上
にとどきそうになったしゅんか
ん、うしろをむいて、力ちからいっば



い、けあげました。
けることだけは、
ラバットの、たっ
たひとつのげいと
うでした。

とたんに、はり
がねがはねあがり、
ふたがあいて、こ
びとのおじいさん
が、でてきました。
そして、手のほこ
りをたたきながら、
いいました。



「いやはや、とんだしっぱいを、やら
したもんだ。いい年としをして、こんなあ
ぶないもののまわりを、うろつきまわ
るんじゃない。だが、おかげで、こ
いつのしかけが、すっかりわかったぞ。」

「ながいこと、はいっておいでにな
ったのですか？」

「二日ふたと、三ばみんだよ。のまず、く
わす、たばこもすえずさ。ああ、は
らぺこだ。」

さあ、いこう。」

こびとのおじいさんは、やぶのな
かにとびこむと、どどん、おかの
ほうへ、あるいていきました。そ
のはやいこと。

